

祖先崇拝に関する実態調査

～宗教社会学の視点から～

D. リード

注：この講演は1988年10月18日、東京神学大学の日本伝道研究所主催で行なわれたものである。『日本人の宗教文化に関する意識調査～キリスト教信者と未信者別の集計結果』をめぐる最初の発表である。したがって、その後用意した「日本のキリスト教信者の祖先関係」（『神学』51号、1989年）は、これより早く発行されたのである。発行の順序はあべこべになったが、できることなら、この理論抜きの講演をお読みになった上で『神学』の研究発表を読まれると、分かりやすいと思う。ここに紹介してある実態調査の統計は、東京神学大学図書館にある『日本人の宗教文化に関する意識調査』と題した本にはいっているので、詳細に関して、この本を参照するようにおすすめしたい。

なお、講演の際は話し言葉であったが、ここでは文章体になおしてある。

始めに

社会変動および宗教変動が、宗教学者や宗教社会学者にとって非常に重要な問題であることは、申すまでもない。私は何年も前からこの問題について深い関心をもってきた。始めてこの問題にぶつかったのは、旧約聖書を勉強している時であった。バビロン捕囚以前のユダヤ教との比較は、この問題に関して興味をもつようになったきっかけであった。捕囚以前のユダヤ教には、悪魔も天使もないし、死後の審判も、罰を受ける場所としての地獄も、復活もない。

しかしバビロン捕囚後のユダヤ教には、これらは全部ある。どうしてそれだけ大きな変化が起こったのであろうか。詳しいことは誰も知らないが、結局はゾロアスター教との出会いによるものだ、という定説がある。二つの社会、二つの文化の接触による宗教文化の変動である。そしてユダヤ教の変動が後に生まれたキリスト教にも大きな影響をおよぼしたことは、ご承知の通りである。

変動する宗教はユダヤ教に限らない。キリスト教も変動する宗教である。ギリシャ文化圏にはいったキリスト教はロゴスの思想によって影響を受けた。またローマの文化圏に入ってキリスト教は法律を重んじる考え方を重視するようになった。あるいは時代を大きく飛んで、英国やオランダからアメリカへ渡ったピューリタンのメンタリティーがアメリカのキリスト教一般に基本的な影響をおよぼしたことも事実である。証拠はいくらならべても結論は同じ：キリスト教は新しい国、新しい文化と出会うたびに、その文化の世界観からなんらかの影響を受けるのである。「キリスト教は一つではない。各国、各文化のキリスト教は特種である。」とのトレルチの言葉は、間違いないであろう。

そこで日本のキリスト教に関してはどうか。日本の伝統的な世界観は、キリスト教、特にプロテスタンティズムになんの影響もおよぼしていないだろうか。

世界観一般

この問題を取り扱う前に、「世界観」という表現についてひとこと説明した方がよいと思う。脱線するようにみえるかも知れぬが、大いに関係があると思う。『広辞苑』によると、世界観とは「世界及び人生の解釈・評価・意義づけの総体」である。この定義は悪くはないと思うが、もう少し具体的に考えてみよう。少なくとも宗教学者が使っている意味での世界観について言えば、まず強調しなければならないのは言語である。言語を覚えることによって人はいろいろな概念、いろいろなカテゴリーを少しずつ身につける。人生の最初の段階では抽象的なものとして身につけるのではなく、かなり具体的なことを意味する表現として覚えるであろう。「おしっこ」とか「うんち」とか「おっばい」

紀 要 1

とか「お父さん」とか、まずお母さんから習うのである。つまり物を意味する言葉、人間関係を意味する言葉から始まって、段々と広がるのである。自分の家族から始まって、段々とお隣りさん・近所・学校などへと広がるのであるが、その時に子供が覚えるのは、言葉だけではなく、おじぎの仕方、挨拶の仕方、つまり礼儀作法はどうあるべきか、人間関係はどうあるべきか、そういうことも覚えるのである。もっと広く言えば、「人のものをとっちゃイカン」と子供に教える時に、「盗み」とか「罰せられる」とか、周りの社会の法律制度や政治制度からの影響もそこにあると言えよう。周りの社会において通用する言葉、概念、解釈、価値などは少しずつ子供の頭、子供の心に入ってきて、その人生を形成するのである。「世界観」はそれほど基本的なものである。

その上、世界観はほとんど無意識的なものである。「この世界観を覚えてきなさい」と誰も言わない。時と場所によって部分的に頼りにするのである。「自分の世界観の内容を詳しく述べてみなさい」と、もし誰かに言われたら、さぞ困るであろう。個人中心的に考えれば、世界観は自分の外にある世界に関するものの見方である。言い換えれば、世界観は眼鏡に例えられよう。全く何も見えない人が眼鏡をかけることによってその目が見えるようになる例えである。眼鏡をかけることによってのみ周りの人間・動物・花など、つまり周りの世界を見て、なにが目にはいるのかにより、また見たものに対する解釈や価値判断により自分の反応や方向を決める。眼鏡の質を意識しながら周りの世界を見るのではなく、眼鏡を通して周りの世界を見るのである。眼鏡なしでは何も見えないが、はずせない眼鏡をむしろ無意識的に使うのである。

しかし考えて見れば、人は自分勝手にその眼鏡を選んで使っているのではなく、周りの人間、周りの社会、周りの文化からその眼鏡をもらうのである。少しずつ受け取るのである。選択の自由がほとんどきかないプロセスである。言い換えれば、世界観は社会化過程の内容である。人間形成の内容である。首尾一貫したものではないかも知れぬ。しかしそれなしでは、人間の子としてこの世に生まれてくる生物は、人間に成りえない。

世界観を身につけることによって初めて社会化された人間になるのである

が、同時に社会化された人間が「当たり前」と思っていることは、世界観から受けたと言えよう。この当たり前のものを意識して客観的に見ることは非常に難しいことである。難しいけれども、この「当たり前」のものは世界観の内容であると言えよう。その全部が人間がもっている、いや人間を人間たらしめるイメージやシンボルであると解釈できるであろう。人間は正にイメージやシンボルの世界の中に存在するものである。自分の受け継いだ世界観をいくぶんか変えたり、改良したりすることは、ある段階から可能であるが、しかし自分が受け継いだ世界観を完全に放棄することは不可能であろう。

そこで、例えば日本育ちの人間なら、当然のことながら日本の世界観、日本の文化から受けた世界観を少しずつ無意識的に身につけるわけである。キリスト教という外来宗教に改心する場合には、人の世界観がどういうふうになるのか、そのアイデンティティーがどういうふうになるのかは、非常に大きな問題である。キリストを愛し、キリストのために生きる、キリストをその頭とする信仰共同体のために一生を捧げると決心する人は、意識的には古い伝統を全部捨てて新しい身になり、キリスト教に伴う新しい世界観だけを自分の世界観にしていると思っ、心の底からそう信じているかも知れぬ。しかし宗教学・宗教社会学の観点からいえば、これは無理な話である。古い世界観を完全に捨てることはできない。自分の今までの世界観を捨てようと思っても、それは自分の目を裂き取ってからものを見ようとするに相当する。古い世界観を完全に捨てることはできないが、受け継いだ世界観を少しずつ変えること、あるいは今までなかったことをそれに付け加えることは、出来ると思う。

日本の世界観

日本の伝統的な世界観には祖先崇拜が中心的な役割を果たしてきたことは、ご存じの通りである。祖先崇拜研究の権威である竹田聰洲の説明によると、「祖先崇拜」という表現はもともと日本語の表現ではなく、英語でいう ancestor worship の訳語である。しかも英語にしても日本語にしても、この表現には「祖先」と「崇拜」という二つの要素があると言えよう。

紀 要 1

「祖先」が亡くなった人、殊に家族・親族の亡くなった人であることに対して、「崇拝」はむしろ生きている人の亡くなった人に対する態度や姿勢を表している。ところがキリスト教にとってこの「崇拝」という言い方にやっかいな神学的な問題がある。つまり一神教であるキリスト教の信者が神以外のもの、神が作られたものとしての祖先を、崇拝の対象にしてもかまわないだろうかという問題である。祖先を崇拝することの善し悪しに関する神学的判断の問題である。しかしこの問題は祖先をめぐる儀礼の実体によるものよりも英語でいう ancestor worship の訳語である「祖先崇拝」という言い回しによるものであるとすれば、ことがいくらか和らげられるかと思う。いずれにしても、これは宗教学的な問題ではない。宗教学・宗教社会学にとって問題となるのは、この儀礼やそれに伴う信念を中心にした宗教変動およびその理解である。便宜上この講演の題には「祖先崇拝」という表現が入っているが、これからはその表現を避けたい。その代わりに「祖先儀礼」とか「祖先祭祀」、あるいはもっと分かりやすい「祖先との関係」といういささか中立的な表現を使いたいと思う。

日本のキリスト教が日本の祖先儀礼伝統によって変動したのか、あるいは変動しつつあるのか、これについて考えるために100余年前に日本に入ってきたプロテスタンティズムと、現代のプロテスタンティズムとを比較する必要があると思われる。日本に入ってきたプロテスタンティズムの思想的背景および現代までの変化過程をはっきりさせることは、私の1988年4月の「アメリカ人の生死観～ピューリタンの葬送儀礼を中心に」と題した始業講演の暗黙の動機であった。明治維新前後に日本に入ってきたプロテスタンティズムにはピューリタンのメンタリティーの影響がまだ強かったと思われる。だとすると、明治初期の日本のキリスト教は、他宗教と妥協する余地がなかったはずである。仏教と密接な関係がある祖先儀礼に参加することは、キリスト教徒に許されなかったはずである。事実、キリスト教信者になった人は、未信者である親や兄弟姉妹の葬式にさえ参加できなかったそうである。

今日のキリスト教信者はもっと寛容的であると言えよう。あまり躊躇せずに仏式の葬式や法事に参加することが、かなり一般的になっていると思う。しか

しこのことは何を意味するのであろうか。日本の伝統的な世界観がキリスト教に影響を及ぼしていることを意味するのか。祖先との関係について、信者と未信者との間に何の違いもないことを意味するのか。祖先関係に焦点を合わせると、信者と未信者の共通点と相違点、またその程度の違いはどこにあるのか。このような疑問に答えることが今回のアンケートの目的である。

アンケートの概要

アンケート自体は1986年度の宗教社会学演習の学生と手を組んで作成したものである。祖先儀礼を中心としたアンケートではなく、もっと幅の広いものであるが、全体的には日本のキリスト教信者と未信者とを比較するためのものである。題は「日本人の宗教文化に関する意識調査」である。その集計結果は付録になっているので、参照にしていきたい。

アンケートは七つの部分によって構成されている。「日本の伝統に関する意見」(項目1～5)、「信心・宗教関係」(項目6～14)、「亡くなられた方々との関係」(項目15～20)、「幸・不幸の将来について」(項目21～25)、「社会一般との関係」(項目26～29)、「宗教関係の所有物」(項目30～31)、「行動」(項目32～41)および「基礎的な事実」(項目42～48)である。本来なら「基礎的な事実」として示されてある性別、年齢、学歴などを順々に照査基準にして、その結果をここで紹介するはずであろうが、ページ数の制限もあるので、今回は性別のみを照査基準にする。(もっと詳しい統計的な分析は東京神学大学の図書館に保存してある。興味がある方は『日本人の宗教文化に関する意識調査』, 2巻, を参照していきたい。)

無記名で、面接なしのアンケートである。配布された970部のうち返送されたのは514部(53.0%)であるが、使用不可能の63部をひくと、使用可能なのは451部(46.5%)になる。

調査相手は三つのグループに分けられる。(a)日本キリスト教団鎌倉雪の下教会の会員および出席者、(b)当会員や出席者の家族および知り合い、(c)東京および名古屋にある反世界基督教統一神霊協会(俗名:統一教会または原理運動)

紀 要 1

グループの会員である。この三つのグループには信者も未信者もいるので、「信者＝鎌倉雪の下教会の会員」と一概に言えない。この点は注目すべきである。

なお、調査相手を選んだときに、無作為抽出の方法を敢えて使わなかった理由に関して、上述の『神学』の記事に詳しく説明してある。

信者と未信者との区別

信者と未信者を比較するために区別する必要があることは申すまでもない。そこで項目7を区別の基準にして、回答者の答えによって信者のグループと未信者のグループとに分けた。項目7は回答者の信仰している宗教について尋ねたものである。基本的なところであるので、この項目の言葉を正確に申し上げた方がよいと思う。次の通りである。「あなたはどのような宗教に関連して信仰していますか。さしつかえなければ、その名前をしめしてください。次ぎの答えのなかから、いくつでもあげて下さい。」その「次ぎの答え」とは、細かくいえば、こういうものである。

神道系

1. 近所の神社（鎮守のやしろ）
2. 教派神道

仏教系

3. 天台系
4. 真言系
5. 浄土系
6. 浄土真宗系
7. 禅系
8. 日蓮系
9. その他の仏教系

キリスト教系

10. カトリック
11. ハリストス正教会
12. 聖公会

13. プロテスタント

その他

14. 天理教
15. 生長の家
16. 世界救世教
17. その他
18. 信仰している宗教はない

このリストのなかから、いくつでも選ぶようお願いしたのである。集計の段階で便宜上、神道系、仏教系、キリスト教系、その他、信仰している宗教はない及び無回答に絞ったが、ここで大事なのは、キリスト教を信仰していると答えた251人を「信者」とし、残りの200人の回答者を「未信者」として数えたのである。図1はその詳細を示している。

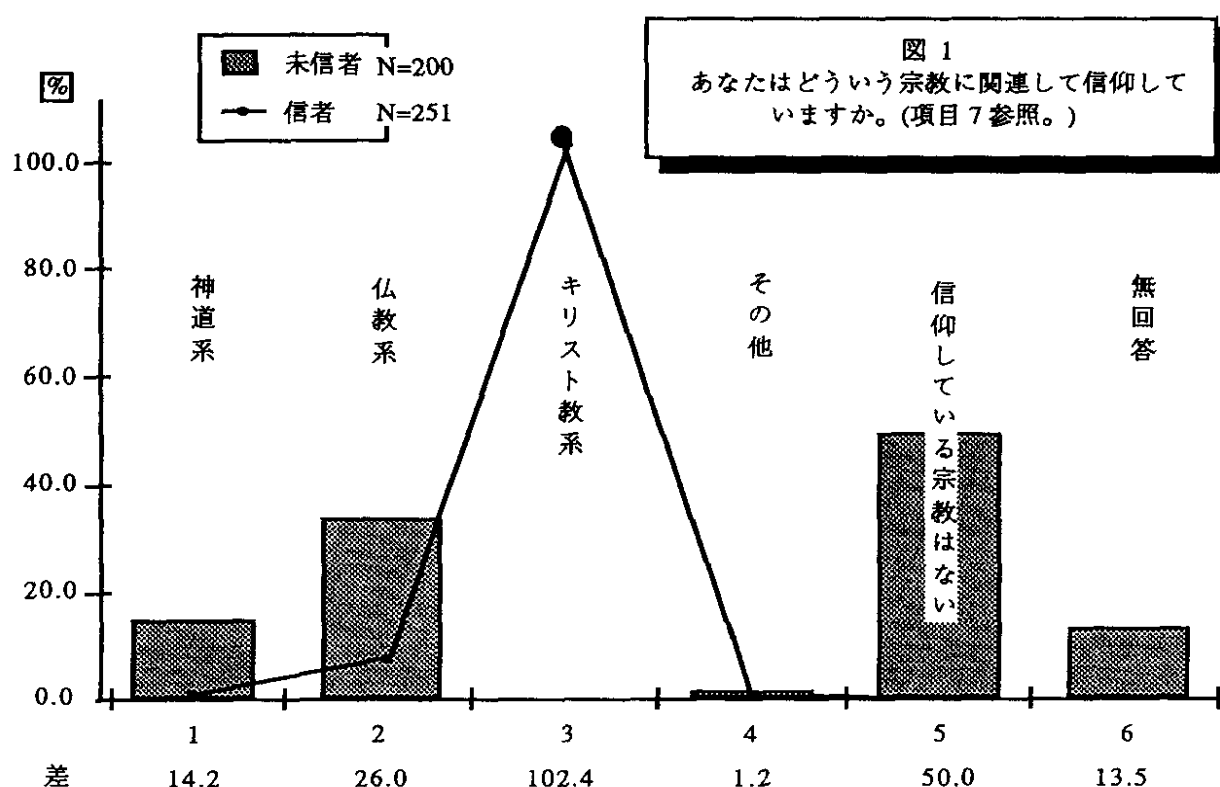


図1を注意深く見ると、二つの問題点があることに気づくであろう。第一に、キリスト教を信じていると答えた人は100%を越えていること、第二に、キリスト教を信じていると答えた人の10%くらいは他の宗教も信じていることである。この二つはおそらく一つの問題の表裏である。つまり神学者がいう「混合主義」の問題である。キリスト教を信じながら他の宗教も信じることと、キリスト教しか信じなくてもカトリックもプロテスタントも信じていること、ここに現われて来るのは混合主義的な現象ではないだろうか。

付録の集計結果を見ると、項目7の場合にはキリスト教信者が91.5%になっていることに対して、図1において102.4%になっている。一見して矛盾に見えるが、そうでもない。付録の場合には回答数の合計(N=281)を100%にし

た計算の仕方であるが、図の場合には回答者数（ $N=251$ ）、つまり人数の合計を100%にした計算の仕方である。どちらでも可能であるが、ここでは信者・未信者を比較することが目的であるので、答えの合計の281ではなく、人数の合計の251を使用することにした。パーセントの違いはこの除数の違いによるものである。

もう一つ説明する必要あると思われるのは、図1の一番下の行の数字である。その頭の方に「差」と書いてあるが、これは信者と未信者とのパーセントの差である。例えば神道系の場合には、未信者は15.0%、信者は0.8%であるので、その差は14.2%になる。後の図においても、計算の仕方は同じである。

有意義の差とは？

信者251と未信者200人とを比較することによってそのパーセントの差が分かるが、どの程度の差が有意義であると思ふべきなのか。ある程度の差はむしろ当然であろう。そこで「当然の差」と「有意義の差」との区別の基準について考えなければならない。日本人一般が当たり前と思われる質問に対して、どれくらいの偏差をしめすだろうか。

手掛かりとして、1961年の『日本人の国民性』（p. 183）を参照にしたいと思う。質問は次ぎの通りである。

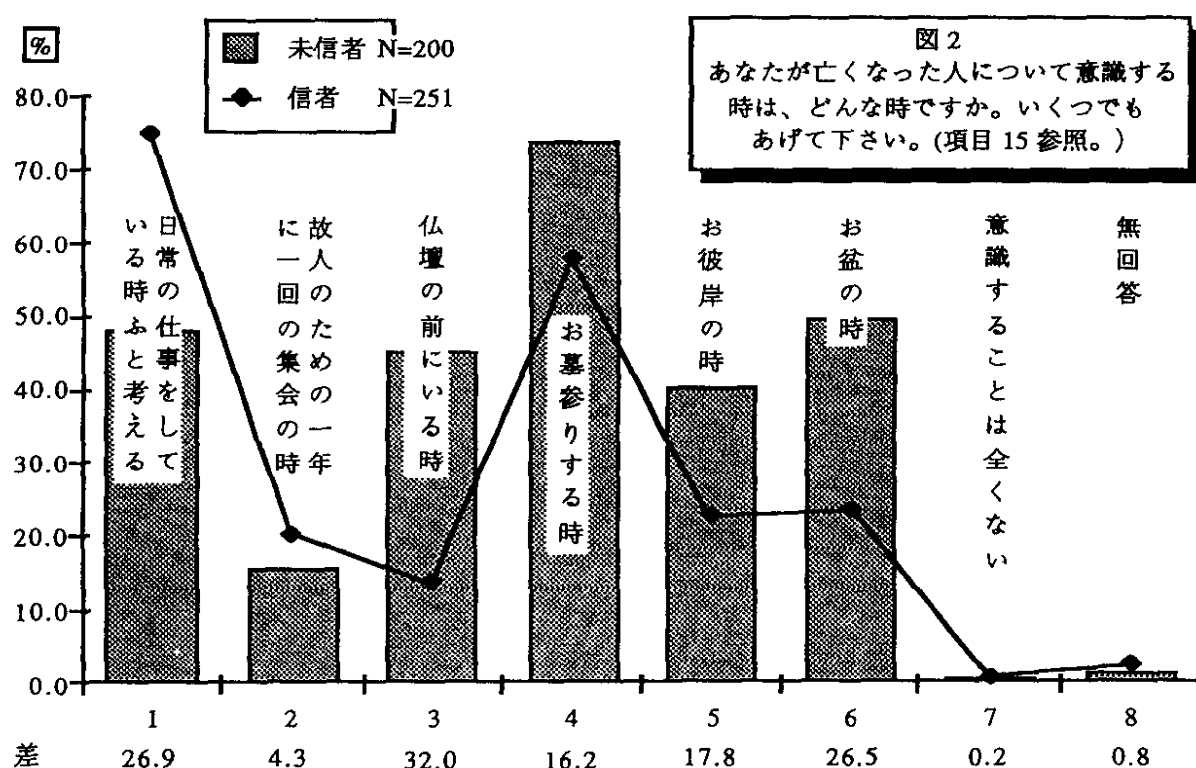
「宗教にはいろいろあり、それぞれ立場が違うが、結局は、1つのことを説いている」というのですが、あなたはこの意見に賛成ですか、それとも反対ですか？

賛成意見が一番多いのは、宗教を信じるグループの74%、一番少ないのは、宗教を信じないグループの50%である。反対意見が一番多いのは宗教を信じないグループの21%、一番少ないのは宗教を信じるグループの11%である。それぞれの偏差は24%と10%である。平均偏差は17%になる。従って日本人一般には17%くらいの意見の偏差があってもおかしくない、ということになる。言い換えれば、0～17%までの偏差は「当然の差」で、18%以上の偏差は「有意義の差」と見做すことにする。

そうと決まったら、ようやく祖先との関係を中心に、信者と未信者を比較するためのデータを見ることができる。便宜上このデータを「意識」と「行動」とに分けてみることにする。

意 識

亡くなった人について意識する時は、どんな時なのかを聞いたのは、項目15である。信者と未信者の答えは図2に示してある。



一番大きな差は32.0%である。「仏壇の前にいる時」に関する差である。この答えは宗教的所有物にも関連する。つまりキリスト教徒の家には仏壇がない場合、この答えを選ばないだろう。それにもう一つ。偏差が大きいからと言っても、それだから大切であるに限らない。場合によって最も小さい偏差の方が大切である。偏差が大きくなればなるほど相違点が目立つ。逆に偏差が小さくなればなるほど共通点が目立つ。見る目によってどちらでも重視することができよう。私の目から見れば、この図において一番大切なところは答え7である。偏差はわずかの0.2%であるが、亡くなった人について「意識することは全く

ない」ことに関して、信者も未信者も同じであることは、これではっきり分かる。

しかし意識する時はどんな時なのかという問題になると、相違点がでてくる。答え2から見てみよう。ここには4.3%、たいした差ではない。仏教でいえば法事、キリスト教でいえば記念礼拝、いずれにしてもあまり差がないのである。

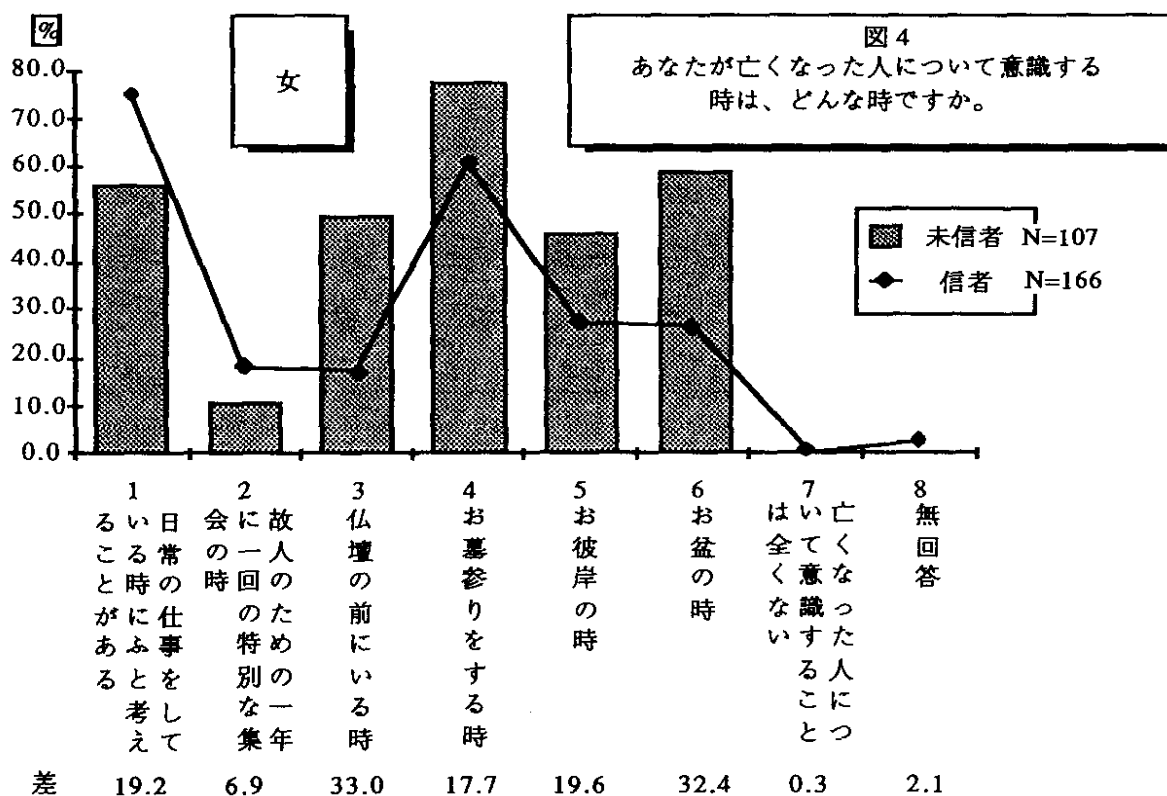
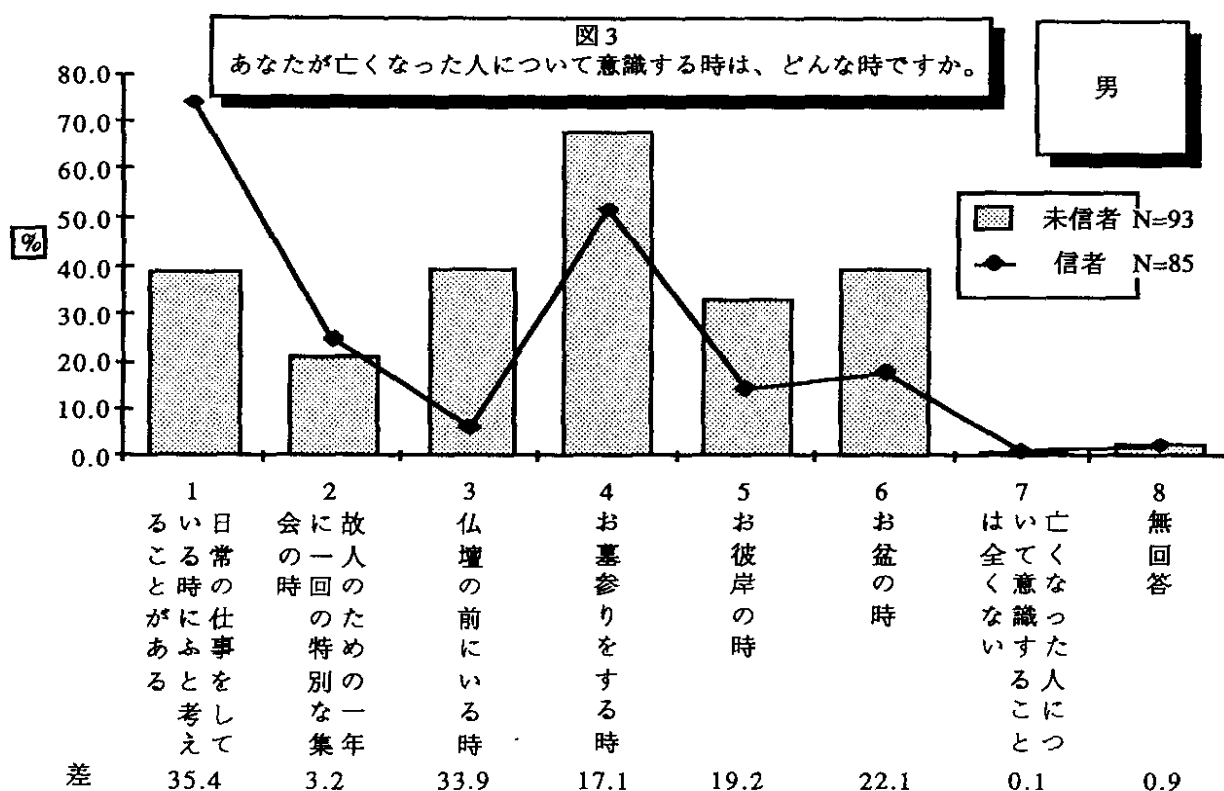
答え3から6までは伝統的なパターンを示すものである。どれを見てもキリスト教信者はやや消極的である。ただお墓参りに関して信者の約60%と出たものは、未信者の74%に割合近いことを見落としてはならないと思う。偏差は18%以下であるので、有意義の差であるといえない。しかしお彼岸やお盆の時に、亡くなった人について意識する信者が未信者に比べて少ないことは事実であろう。

しかし伝統的なパターンと違って、日常の仕事に関する答えは1はかなり面白いものだと思う。これによると、日常の仕事をしている時にふと亡くなった人について考える未信者の48.0%に較べて、信者はなんと74.9%にのぼる。かなりの差である。これはどういうことか、はっきり分らないが、どうもマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の日本版の材料になりそうなものである。

図2を全体的に見てやはり強調したいと思うのは、答え7である。相違点も大事ではあるが、ここで目立つのは共通点である。亡くなった人について「意識することは全くない」ことに関して、信者も不信者も同様である。

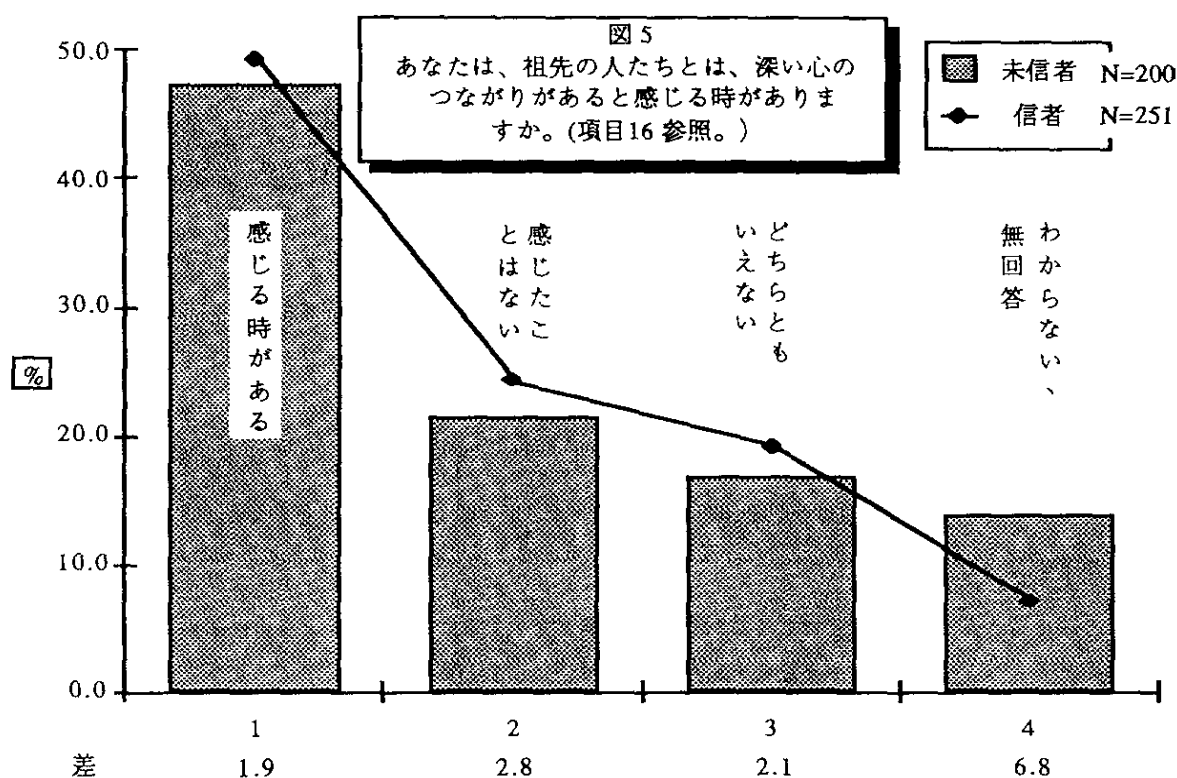
では性別に焦点を合わせると、どうなるだろうか。先ず男に関するデータを見てみよう。(図3参照。)

答え1の場合、男性の信者の74.1%に対比して男性の未信者がやく半分くらいの38.7%であるので、35.4%の大きな偏差になっている。女性は男ほどではないが、やはり女性の信者は女性の未信者より日常の仕事をしている時にふと亡くなった人について考えるようである。(図4参照。)その上、信者の男性と女性との間にはほとんど差がないことも目につくところである。信者・未信者の祖先観と仕事の関係がどういうふうになっているのかは、興味深い問題である。



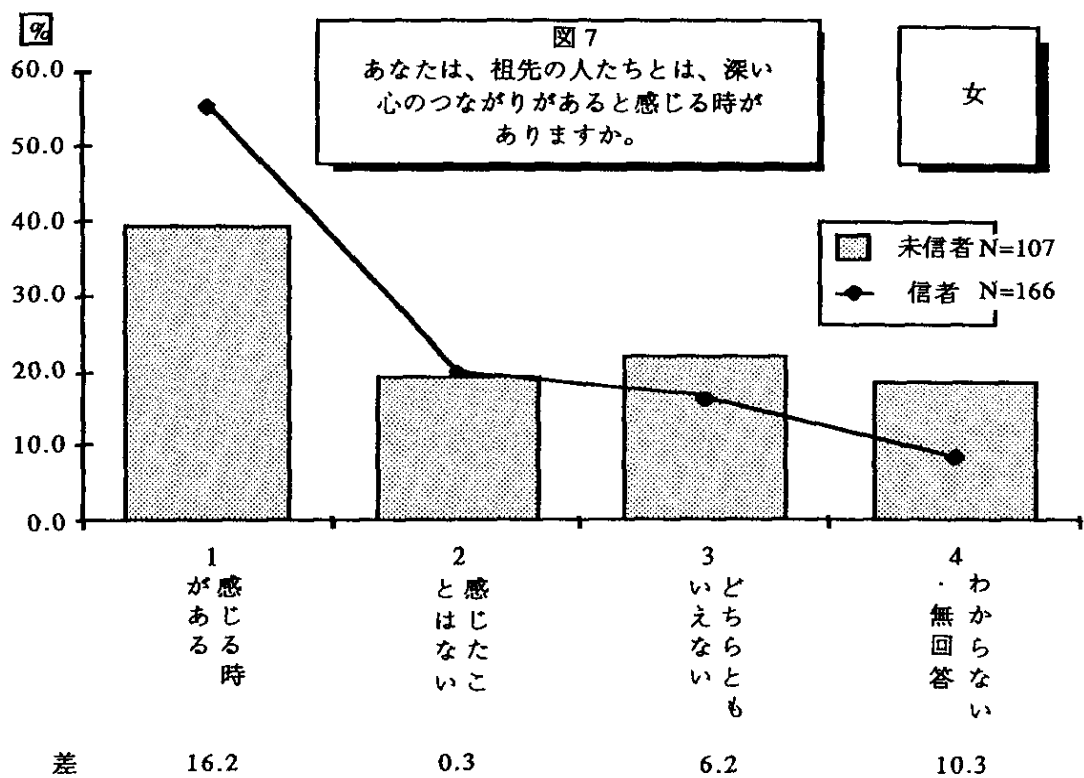
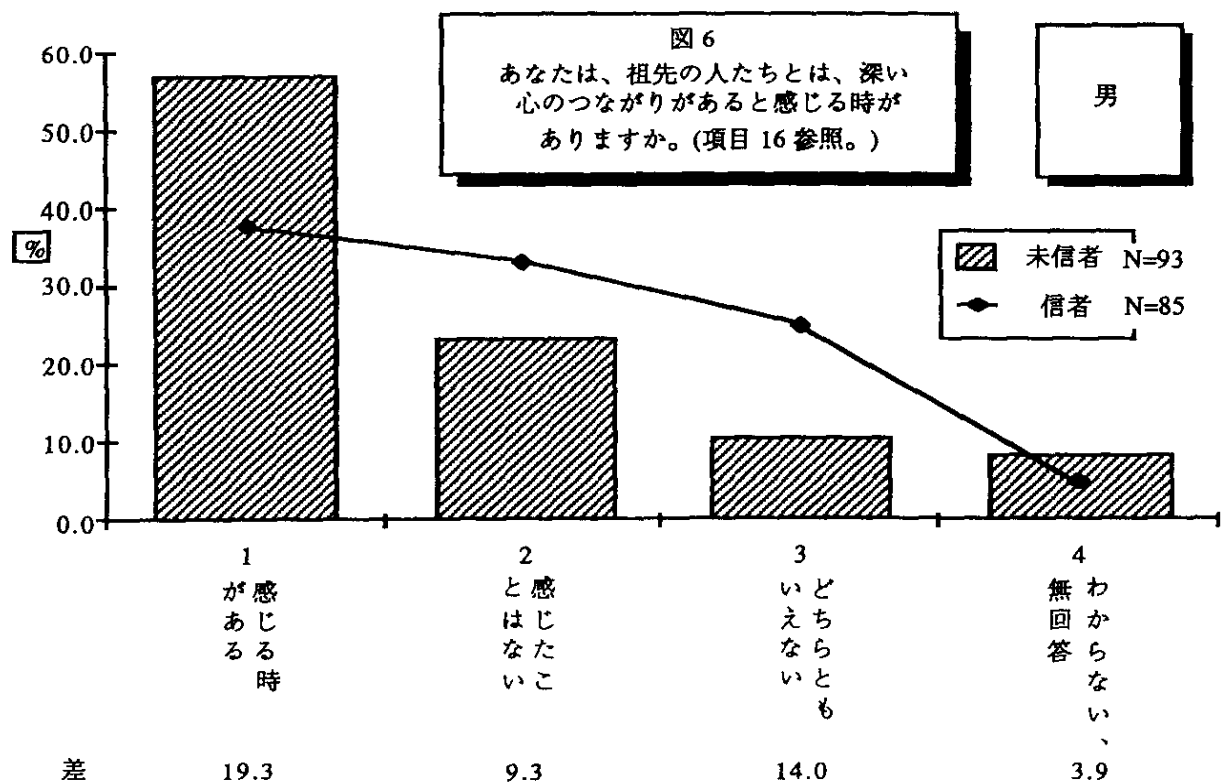
後のところに関して性別なしのデータに較べてもそれほど大きな違いはない。信者であれ未信者であれ、男女共に亡くなった人について全く意識することがないと答える人は、まれである。

もう一つ別の問題は、祖先との心のつながりについてのことである。項目16においてそのような質問がある。性別なしのデータは図5にある。



これは一目で分かるように、信者・不信者の差はほとんど何もない。「感じる時がある」と答えた人の場合には信者も不信者も同様であれば、「感じたことはない」と答えた人の場合にも信者も不信者も同様である。ところが性別でみると、少々変わってくるのである。男性のことは図6，女性のことは図7に示してある。

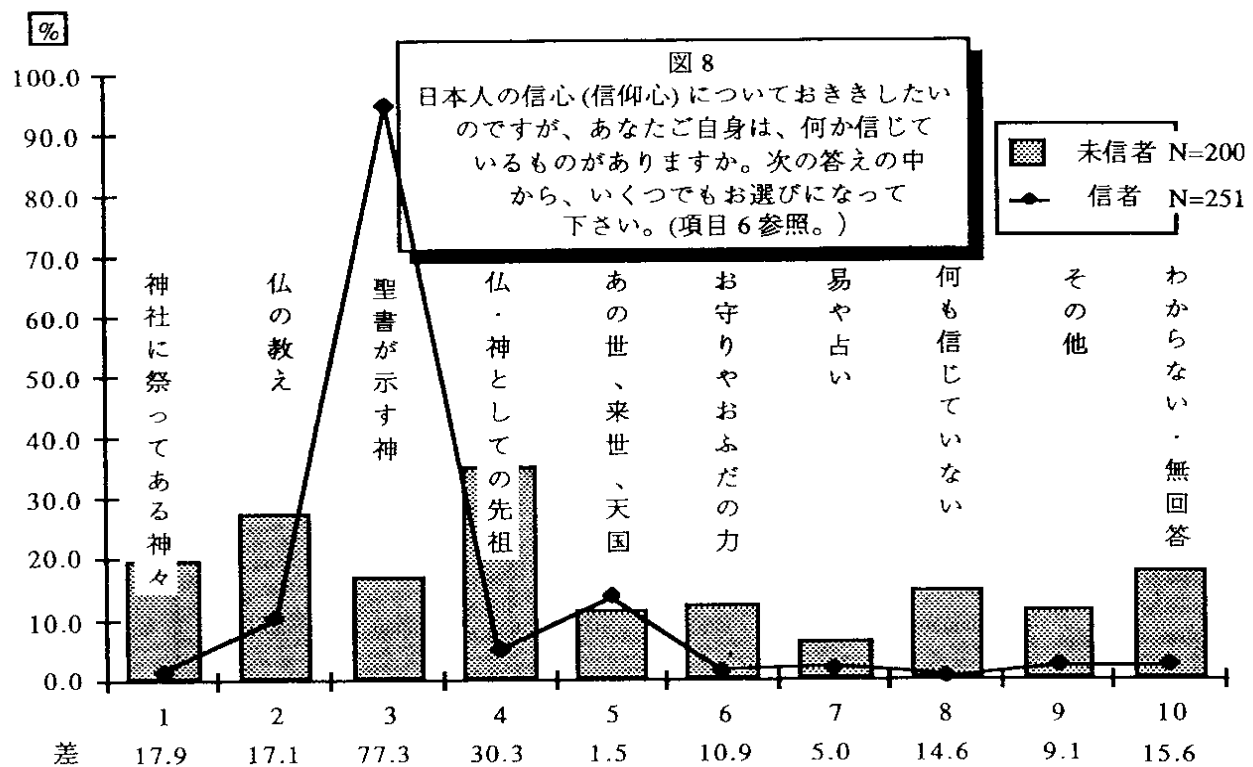
「感じる時がある」と答えた人のうち、不信者の男の方ははるかに肯定的である。彼らの57.0%に対して信者の男はわずかに37.6%である。女性の場合には、反対である。図7が示しているように信者の女性の55.4%に対して祖先と深い心のつながりがあると感じる不信者の女性は39.3%である。この点に関しては信者の女性の方が肯定的である。



紀 要 1

信者の男女と未信者の男女とのパターンがあべこべになっていることが何を意味するかは、まだよく分からないが、こういう違いが現われたことは事実である。しかし男の図を見ても女の図を見ても、信者と未信者には60%弱の合計のうち40%くらいのオーバーラップがあることは重要であると思う。これを念頭に入れると、男女の別を問わず信者にも未信者にも亡くなった人と深い心のつながりを感じる人が圧倒的に多いことは、よく分かる。

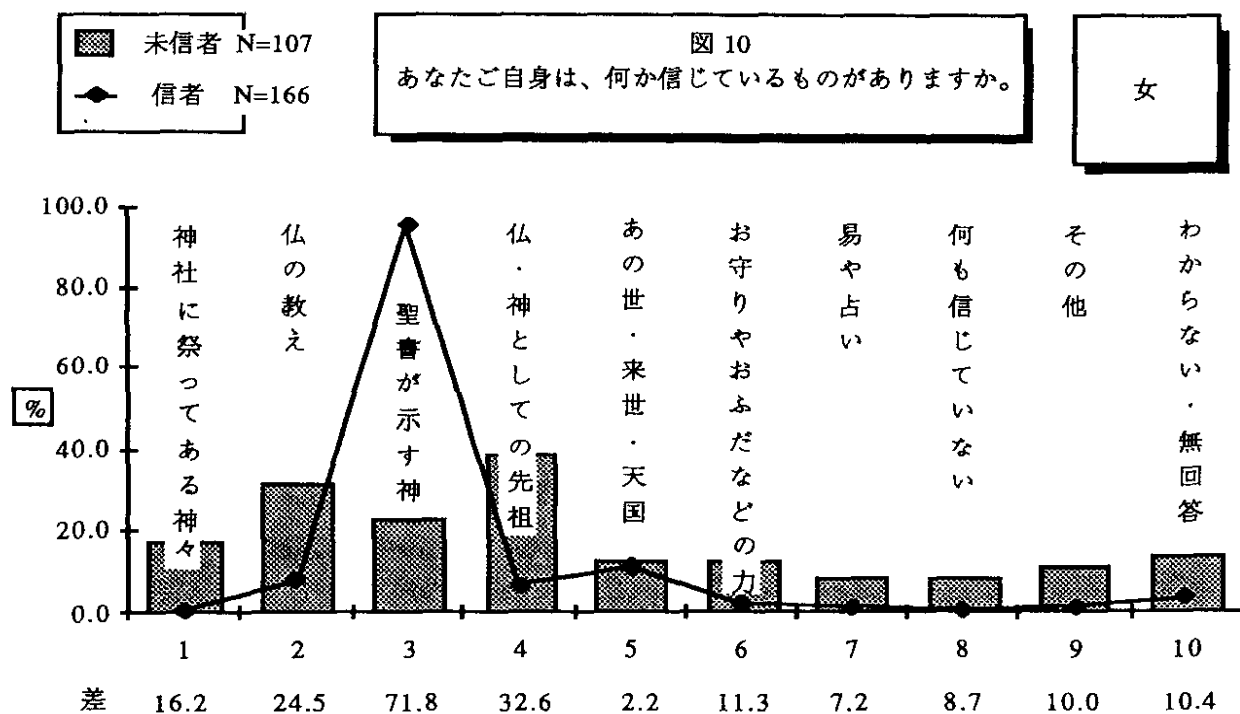
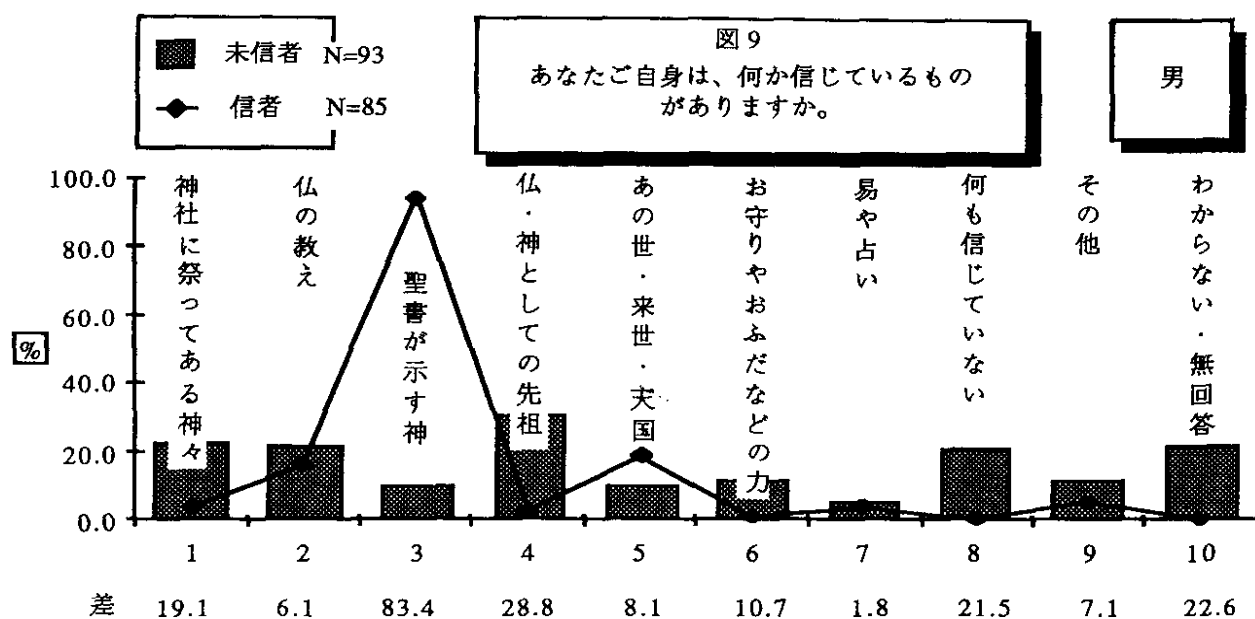
項目6は人が何を信じているのかについての問いである。(図8参照。)



左から見てみると、「神社に祭ってある神々」を信じていると答えた人には、未信者19.5%、信者は1.6%である。「仏の教え」になると、未信者は27.5%であるが、信者の10.4%も仏の教えを信じていると答えた。「聖書が示す神」の場合には、キリスト教徒はほとんど例外なく信じていると答えたことに関して驚くことはないが、キリスト教徒ではない人の17.5%も聖書が示す神を信じていると答えたのは、驚いてもおかしくないであろう。信者・未信者の差は77.3%で、目立つものであるが、100%の差ではないことにむしろ驚く。四番目の答えは「仏・神としての先祖」である。未信者の35.5%がこの答えを選んだが、

この答えを選んだ信者はわずか5.2%である。聖書が示す神を信ずることは、キリスト教徒にとって、先祖を神として信じないことを意味するであろう。ここにキリスト教の一神教的なオリエンテーションが表われているのではないかと思う。

同じ質問に対する答えを性別で見てもよい。男性は図9、女性は図10である。



紀 要 1

前の図8に較べてこの図9はどこが違うかというと、特に目立つのは「仏の教え」を信ずる比率である。性別なしの図によると信者の10.4%は仏の教えを信じていると答えたが、信者の男性のみになると、仏の教えを信じていると答えた人の比率は16.5%である。未信者の男性とあまり変わらない。

しかし女性の場合には、信者と未信者との間にかなりの差がある。仏の教えを信じている信者の女性の7.2%に対して、未信者の女性の31.8%が信じていると答えた。仏の教えを信じているか否かに限っていえば、信者であれ未信者であれ男性は似ているが、女性の信者と未信者とは目立つほど異なるのである。

「仏・神としての先祖」を信じているグループを比率によって整理すれば、一番多いのは未信者の女性（39.3%）、次ぎは未信者の男性（31.2%）、それから信者の女性（6.6%）と信者の男性（2.4%）。男性を見ても女性を見ても信者と未信者との差は大きい。しかし信者を見ても未信者を見ても男性より女性の方が仏の教えを信じていることは見過ごしてはならないであろう。

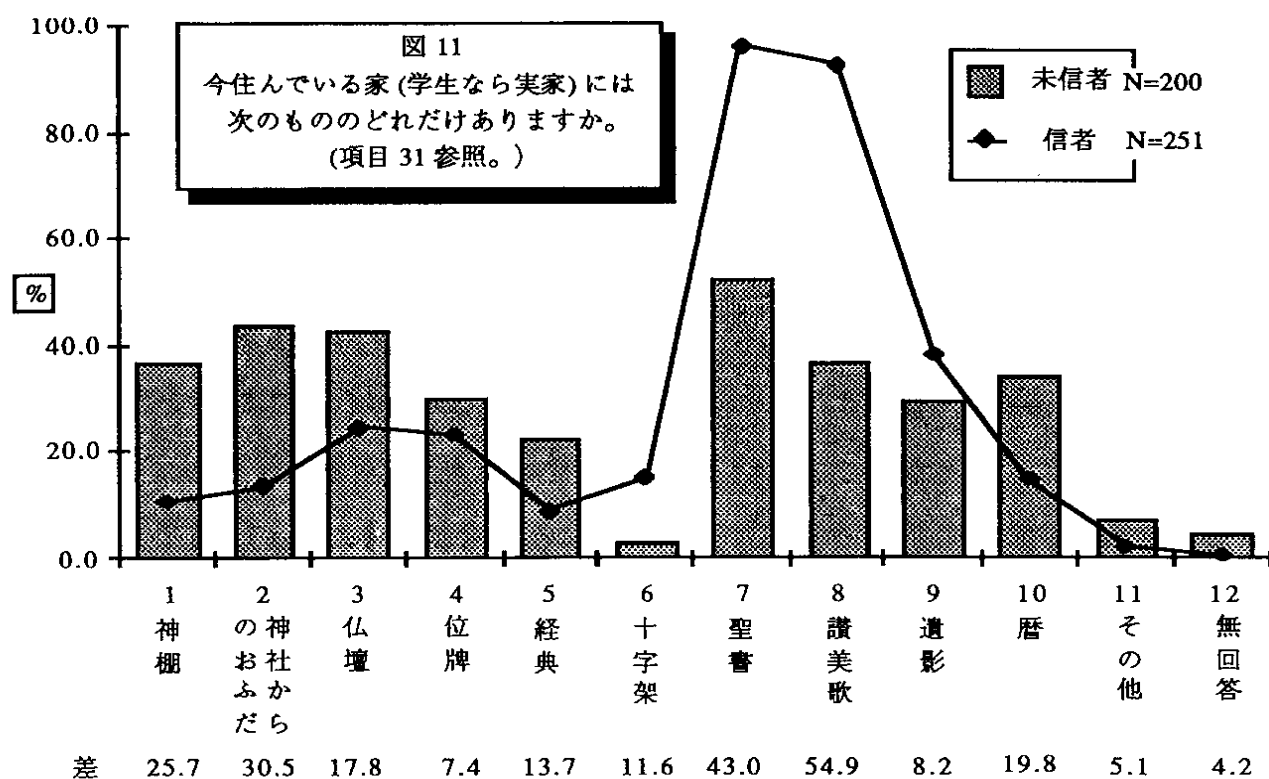
行 動

ステレオタイプでいえば、あるいは理念的的にいえば、日本人一般は祖先を敬うために三つのことをしている。第一に毎日、御飯・飲み物などを供えること、第二にお墓参りすること、第三に法事をしてもらうことである。ステレオタイプはそうであるが、日本人一般は実際にどの程度そういうふうに行っているだろうか。また日本のキリスト教信者はこの三つのこと、あるいはそれに相当するようなことを、どの程度行っているのだろうか。

毎日、御飯・飲み物などを供えるために、一般的にいえば、仏壇が必要であろう。ところが仏壇の有無に関して信者と未信者とを比較すれば、どうなるだろうか。この問いに関するデータは図11に示されている。

仏壇が回答者の家にあるか否かに関して、図11が指摘しているように、「仏壇あり」と示した人のうち、未信者は42.5%、信者は24.7%である。偏差は18%弱である。

このアンケートを作成した段階でキリスト教信者、特に自分の家に仏壇がな



い信者は、仏壇とその位牌の代わりに遺影を飾っていたが、集計の結果をみて、それは誤解であったようである。もし仏壇と遺影が二者択一的な関係にあったら、仏壇がある家には遺影はあるはずがない、また遺影がある家には仏壇はあるはずがない。しかし表 1 が示しているように事実違う。

表 1 仏壇と遺影との有無(%)

	信者		未信者	
	仏壇あり (N = 62)	仏壇なし (N = 189)	仏壇あり (N = 85)	仏壇なし (N = 115)
遺影あり	53.2	33.3	40.0	22.6
遺影なし	46.8	66.7	60.0	77.4

信者の場合には、その家には「仏壇あり」と答えた人のうち、遺影の有無の割合はやく半々である。「仏壇なし」と答えた信者のうち、その割合は1：2である。未信者の場合には、「仏壇あり」と答えた人のうち、遺影の有無の割合が2：3であることに対して、「仏壇なし」の割合はやく1：3である。信者であれ未信者であれ「仏壇なし」の家に較べて「仏壇あり」の家は遺影を飾る傾向が強いようである。また逆に「仏壇あり」の家に較べて「仏壇なし」の家は遺影を飾らない傾向を示すものである。いずれにしても、仏壇と遺影とは二者択一的な関係にあるのではないことは、はっきりしてきたと言えよう。

アンケート項目17番と18番に移りたいと思う。片方は回答者の家には仏壇がある場合、その前でどういうことが行なわれるのかについての質問で、もう一方は回答者の家に仏壇がなくても故人を記念するためにどういうことがおこなわれるのかについての質問である。ところが集計している時に気づいたが、この二つの項目に問題がある。アンケートを集計するたびに経験することであるが、必ず「この聞き方はうまくない」とか「これに加えてそれも聞けばよかった」と反省するのである。この二つの項目はその一例である。なぜかという、ここで問題となっているのは、本人のすることではなく、本人の家にはどういう行ないがあるかに限って聞いたからである。今になって後悔してもしようがないが、このような穴がこの二項目にあるので、性別的に見ることはできないのである。しかしそれだからと言って、この質問が無意味であるに限らない。ちょっと面白いデータはここにもあると思う。(図12-13参照。)

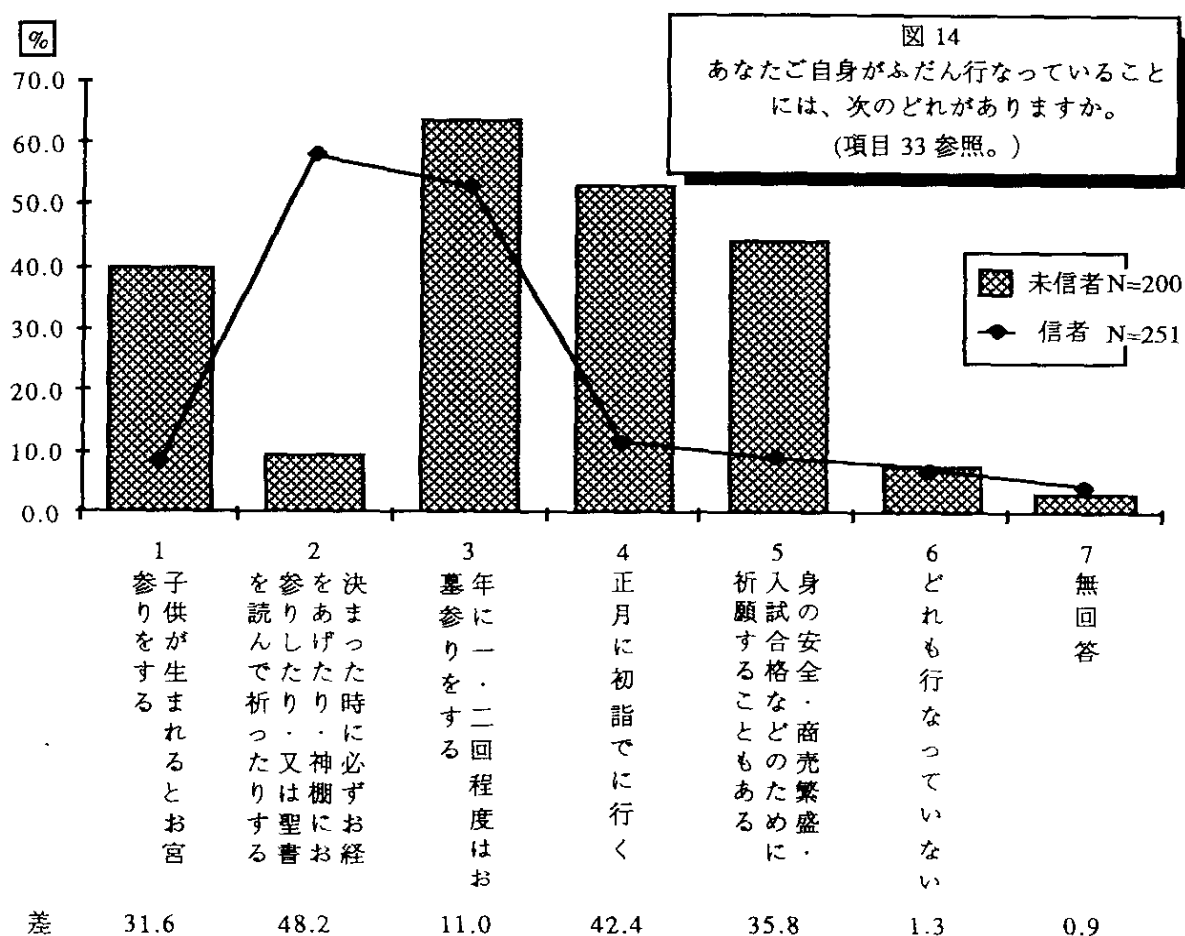
〈食べ物・飲み物〉 回答者が現在住んでいる家には仏壇がある場合、「毎日、御飯・飲み物などをあげる」家のうち、未信者の35%に対して、信者はやく20%である。それに対して、仏壇がなくても遺影を飾る場合、その行ないを習慣としている家には、未信者のやく15%に対して、信者はたった4%である。

従って仏壇がある家にはこの伝統を守る傾向が比較的強いであると言えよう。

いただいた食べ物・果物などをあげる習慣に関しても、同じである。仏壇がある家の場合、未信者はやく32%、信者は20%弱であるが、仏壇がない家の場

合、未信者の16%弱に対して、信者は8%強である。ここにも仏壇の有無はかなり大切な要素であると言えよう。

〈墓参り〉 墓参りすることに関する質問は、本人の行動を中心としたものである。性別的な結果を考慮する前に、全体的な結果を見てみよう。(図14参照。)



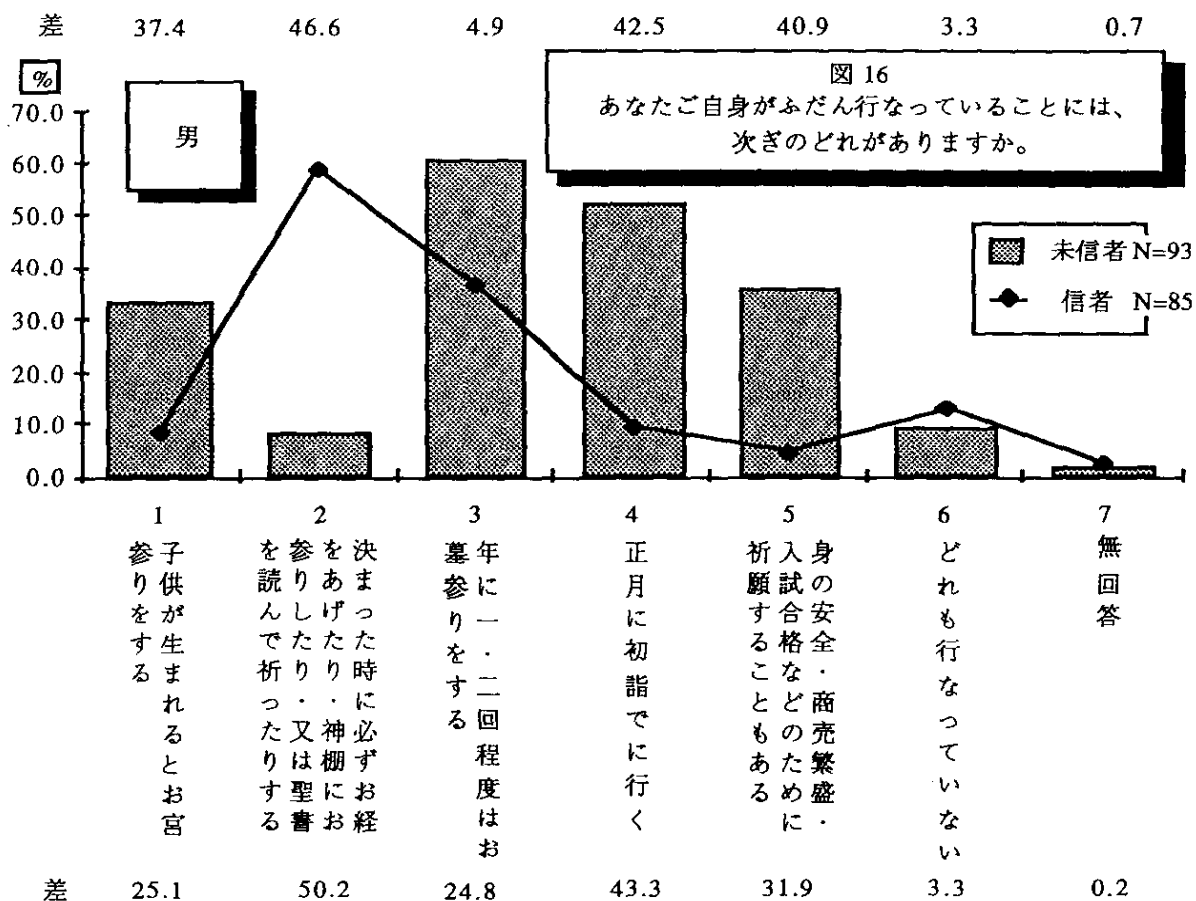
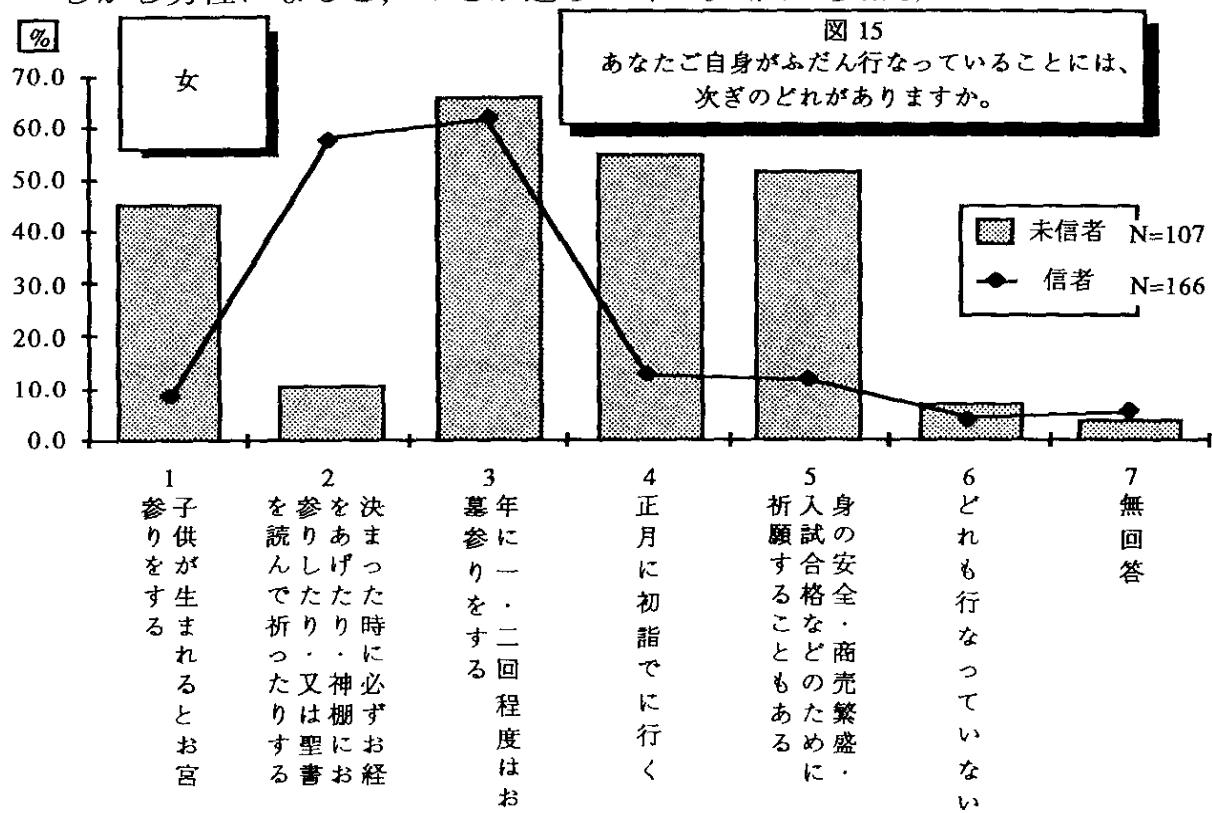
「年に1-2回程度は、お墓参りをする」という答えを選んだ未信者の64%に較べて、信者の53%はややひかえめではあるが、有意義の差ではない。信者の墓参りと未信者の墓参りには、ほとんど変わりがない。

では性別的にみれば、どうなるだろうか。女性のデータは図15、男性のは図16に示されている。

女性の60%以上が年に1-2回ぐらひは墓参りをしていることは、信者・未信者の別を問わず、同じである。どちらかといえば、未信者の女性の比率は多少上回るが、偏差の4.9%は有意義ではない。この点に関しては、信者の女性

と未信者の女性とは同様である。

しかし男性になると、ことが違ってくる。(図16参照。)



未信者の男性の61.3%に較べて、信者の男性の36.5%ははるかに低いものである。その偏差のやく25%も有意義の差を示しているに違いない。おそらくこの差は職業や年齢に関係があるかも知れないが、それにしても信者の男性と未信者の男性との間にこれだけ大きな差がある理由は、まだ明らかになっていない。全体的に言えば、未信者の男性も女性も60%ぐらいの程度で年に1－2回ぐらいは墓参りをしている。信者の女性も同じである。しかし信者の男性の60%強はあまり墓参りをしない。今のところではこれは謎である。

〈法事・記念礼拝〉 アンケートには回答者の家の行動としての法事や記念礼拝についての質問もある。(上の図12および13参照。) 本人の行動に関する質問ではないので、性別のグラフを使用することはできないが、データ自体はかなり有意義なものであると思う。

図12や13において、8番目の答えは法事や記念礼拝に関連する。回答者の家に仏壇がある場合(図12),「お寺のお世話になる」と答えた人のうち、信者は20%弱、未信者は37%である。未信者のパーセントの方が上回るものである。それに対して、回答者の家に仏壇がない場合(図13),「一周忌、三周忌などと言わないが、その時になると、牧師・神父にお願いして、記念会をする」と答えた人のうち、信者は20%強、未信者は8.5%である。信者のパーセントの方が上回るものである。

この点はわたくしにとって非常に興味深いところである。西欧のプロテスタントイズムにおいてお通夜がありうるし、お葬式も無論のことであるが、その後の故人のための記念礼拝は無いのである。あるのは、亡くなられた信者全体のための11月1日の諸聖徒祭(All Saints' Day)である。しかし日本の伝統によると、お葬式のあと、3年、5年、7年…33年、場合によって50年までの儀式がある。しかもこれらの年数はお寺に行って法事をしてもらう時で、その間の年数には、本当は自宅の仏壇の前で小規模の法事をする事になっている。従って、ほとんど毎年故人のためのなんらかの儀式がある。日本の基督教信者の二割以上が、信仰生活の大事な一面として、この伝統的なパターンを守ろうとしていることは、私にとって非常に意味深いものである。

結 び

この講演の冒頭に、日本のキリスト教は日本の伝統的な世界観から何かの影響を受けていないか、という問いを提供した。特に祖先との関係について日本の古くからの伝統からの影響を受けていないかという問いであった。今までのデータは、「意識」と「行動」という二つのカテゴリーによって見てきた。冒頭に出した質問に戻って、仮にでも答えたいと思う。

「意識」、つまり意見や信念の分野に関して、古くからの世界観からの影響は、日本のキリスト教にあまり見えなかった。「仏・神としての先祖」を信じていると答えた信者は5%ぐらいはあったが、これは割と少ないパーセントであると思う。

信者の一割強が「仏の教え」を信じていると答えた人がいることは、少々驚くところであるが、これは祖先観と直接関係がないので、これ以上追究しない。

しかし「行動」の分野になると、ことが違ってくる。大胆な言い方ではあるが、一般的に言えば、アメリカなどに比べて日本は儀式を重んじる文化であると言っても過言ではなかろう。礼儀正しいことを評価する文化であろう。なぜそういうふうになったのかは、なかなか面白い問題であるが、ここで強調したいと思うのは、この礼儀正しさ、儀式的な行ないを重んじる傾向が祖先儀礼にも関連することである。

毎日、仏壇または遺影にいて御飯・飲み物などを上げることが礼儀正しい行ないであるとする文化において、その雰囲気の中で育てられた人は、キリスト教信者になってもそういうふうにするであろう。それは人間としてなすべきことである、当たり前のことであると思うのは、ごく自然ではないだろうか。

次ぎに墓参りに関することである。日本人の墓参りとアメリカ人の墓参りについてのデータがないので、印象しか述べられないが、確かにアメリカのプロテスタント信者に比べて、日本のプロテスタント信者の墓参りする頻度は高いと思う。ここにも日本の伝統的な世界観の影響があるのではないだろうか。

それから故人をめぐる儀式としての法事、記念礼拝、墓前礼拝などのことで

紀 要 1

ある。別のアンケートで分かったことであるが、日本のキリスト教信者が牧師・神父にお願いして特別の記念礼拝をしてもらう時期がいつなのかといえは、大体において家族の人が死んでからの1年目、3年目、5年目などである。つまり一周忌、三周忌などに相当するようなパターンである。今度のアンケートの回答者のうち、キリスト教信者の251人の二割ぐらいは、このようなパターンを守っている。ここにもキリスト教信者の祖先儀礼に関連する行動という分野において、日本の伝統的な世界観による影響があると思う。